
王子と護衛と、姫様と

惟音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王子と護衛と、姫様と

【Nコード】

N8618B

【作者名】

惟音

【あらすじ】

昔々、とても平和な小さな国がありました。そこにはろくでもない王子様と、王子様を馬鹿呼ばわりする、健気な護衛役がおりました――。

01. ろくでもない王子と振り回される護衛（前書き）

……ありがちな内容だと自負しております……（汗

01. ろくでもない王子と振り回される護衛

「よし、アメリカについてこい。城を出る」

そんなことを言いながら、アメリカの名を呼んだ彼は外套を手にとった。

「は——…、は？」

不覚にもはい、と頷こうとしてしまったのは、その言葉を呑み込めなかったから。しかしそれも尻すぼみに消え、王子である彼、イシュメルに不適切な単語で問い返す形になった。

イシュメルはばさりと外套を羽織ると、自室の扉ではなく、窓を開け放す。そこでアメリカを振り返り、

「なんだ？　まさか護衛のくせして俺を一人で行かせるわけはあるまいな」

不適な笑みに背筋が凍る。

「お、お待ち下さいイシュメル様！　何を申されますか、もうすぐ隣国の王女様がこちらへ来られるのですよ！？」

「ふん。どうせ縁談だろう？　今回も俺は破棄するつもりなんだから、別にこなくても良い物を」

窓枠に足をかけたとんでもない王子を、アメリカはがっしりと捕まえた。

「それでもっ、それでもせめてお食事くらい一緒になされて、その間だけでも微笑んでいるのがイシュメル様のお仕事でしょう！」

「嫌」

即答ですかこのろくでなし王子！　アメリカはべそかき声で心中で毒づく。

ほらいくぞ。そう言って柔らかく笑んでこちらに手を差し伸べるイシュメルは、肩まである金色の髪と、空色の瞳が小さな顔にきちんと並べられていて、乙女であるアメリカからしても羨ましい。

この外見で、その中身。

どこでどう育て方を間違ってしまったのかと、愚痴の一つも零したくなる心情を誰かにわかって欲しい。

しかし、自分以外の護衛は全てイシュメル自信が「いらん」の一言で片付けてしまい、王子殿下の部屋に無許可で入ることを許された者は王族以外でアメリカのみ。

よって、イシュメルの暴拳を抑えるのはいつもアメリカの役目だった。

「駄目ですったら駄目です！ イシュメル様もご存知ならば申し上げますが、今回の縁談はとくに重要で、向こうの国からやっと色よいお返事がいただけたらしいです。このたびは何としてでもご婚約にこじつきたいと国王陛下は仰っておいででした！ そんな陛下のお心を、さらに痛ませるおつもりですか王子！」

はあ、と息を荒くしながらまくしたててから、何も言わないイシュメルにもしかして、と期待にささやかなサイズの胸を膨らませた。上目遣いにそっとイシュメルを見やる。と、

「そんなもの、俺が知ったことか」

一蹴するとともにアメリカの手首を掴む。「おら！」乱暴に引っ張られ、一瞬世界がぐるんと回り――。

無意識に受身を取ろうと首を丸め、地面につく直前、手首からの反動で自分の体を転がした。それでも2階からの不意打ちの飛び降りにはさすがに予想外で、しばらく丸まったまま動けなかった。

「アメリカ起きろ。早くここから離れなければ衛兵に見つかる。まあ見つかったら見つかったで買収なり力ずくなりすればいい話だけだな」

さらりと言ったのけた言葉に黒い部分が含まれていることには、敢えて何も言わない。ただ、

「こんの……っ馬鹿王子！ 私を殺すつもりですかああそうですか！ あんなもの常人に強いるあなたは正真正銘の馬鹿です！」

けろりとして立っているイシュメルに、アメリカは涙目で叫んだ。「まだお嫁にも入ってないし貰ってくれる先も見つかっていないの

に、死ななくとも顔に傷でもついたらどうしてくれるつもりなんですか！　王子を守っての名誉の傷ならともかく、こんな馬鹿げたことで傷がいたら笑いものどころか――」

「そんなことになったら俺が貰ってやるから心配するな」

馬鹿だとかの暴言には、幼い頃からの付き合いなので慣れているイシュメルだ。その部分には全く触れず、変わりに思いもよらぬ所をついてきた。

一瞬呆けてしまったアメリカは、その言葉を咀嚼する為に十分な時間を要してから、

「私を貰う前に隣国の王女様を貰ってください――！！」

アメリカのその声の所為で衛兵が駆けつけてきたのは、言うまでも無い。

01. ろくでもない王子と振り回される護衛（後書き）

ここまで読んでくださりありがとうございました。

もう少し続く予定……です（何故つまる

宜しければもう少しだけ、お付き合いくださいませ。

02. 溜息ばかりの護衛と忘れられた庭園

鏡の中から、黒髪に黒い目の見慣れすぎた人間がこちらを見返している。調子の良い時でもこの容姿は中の中の上。他者の意見を否定したいとも思わないし、自分でも自負している。

そんな中途半端な、それでも16年付き合ってきた容姿に向き合う気になった原因は、あの馬鹿王子以外の何者でもない。

そんじょそこらの女の子よりもよっぽど綺麗な顔をした王子様は、さきほど衛兵に引っ張られて部屋に戻ったはずだ。

そしてここは、アメリカの自室。王宮から少し離れた、兵士用の宿舎の中だ。

「はあ……」

溜息も何度目だろう。

さっきの命懸けのちょっとした空中飛行は、イシュメルの部屋が2階だったことも幸いして、あざの一つですんだ。が、肝心な所はそこではないのだ。

———そんなことになったら俺が貰ってやるから心配するな。

馬鹿王子様は、真面目な、本当に真面目としか言いようのない顔でそう言った。しかし、そんなものは信じられるはずも無く、信じたいとも思わない。……そのくせ自分の容姿をもう一度確認したことについては、矛盾していると自覚しているが。

「私を貰ってくださいるとか言う前に、婚約の件をもっと前向きに考えてくださいよ……」

頭に響く鈍痛に目を伏せながら、鏡に背を向け飾り気の無い部屋を出る。

もうすぐ隣国の姫——ジュナス国のミアラーヌ王女が王宮に到着するらしい。王子も迎えに出るはずなので、アメリカも行かないわ

けにはいかない。

宿舎を出る。王宮までは庭園の裏から入るのが近道だと知っているのは、おそらくアメリカと、イシュメルぐらいだろう。誰も手入れのするものがない、荒れ放題の庭をぬけつつ、ふと昔を思い出した。

アメリカとイシュメルは、身分の違いを無視すれば「おさななじみ」だ。

まだそれほど王子とただの少女、ということを意識していなかった何年も前、毎日のように二人で王宮を駆けまわった。

そのころはまだここも綺麗に手入れをされていて、季節ごとに色とりどりの草花が、上等な絨毯のように咲き乱れていた。

今では新しい庭園が造られ、ここは忘れ去られている。だが、アメリカにとってここは思い出の場所だった。考え事をしたり落ち込んだときには、ここで一人過ごすのが習慣だったりもする。

そういえば、どうしてここが心に強く残っているのだろう。ここだけじゃなくて、もっと城内なんかも毎日のように歩き回ったはず――。

「っ!」

考えに耽っていたら、膝丈のズボンから除く素足に何かが掠った。

「……………薔薇?」

足元、とても低い位置に、その薔薇はあった。

蕾だが、色は赤だろう。幾つかの蕾が風に揺れる。きれいな物には棘がある――よく言ったものだと言いたく苦笑する。手入れのするものがないなくなったのに、やけにこの薔薇の周りは綺麗な気がする。相当に生命力が強いのだろうか。

足からは多少血が滲んでいるが、さっきのあざに比べれば何ほどのこともない。

ポケットから予備のハンカチを取り出して適当に血を拭いてから、今度は足元にも気をつけながら庭をぬけた。

02. 溜息ばかりの護衛と忘れられた庭園（後書き）

読んでくださり、ありがとうございました。

03. 猫かぶりな王子様と麗しき白の姫君

「遅かったな」

飄々とそんな言葉を吐いてくださる王子に引きつる笑みを返しつつ、アメリカはその斜め後ろについた。城の入り口の扉の前に、大勢が道に沿ってずっと向こうまで並んでいる。扉の前は階段で、王子はその最上段にいた。イシユメルはきっちりとした装いをしており、集まった貴族達の目を引いているのがわかる。この性格さえなければ完璧な王子なのだが。

「ミアラーヌ王女、御登城！」

衛兵が叫び、こだまするファンファアレ。……あまりに派手じゃないですか？ 思ったのも束の間、アメリカは目を零れんばかりに見開いた。

「王子……」

「なんだ」

ファンファアレと歓声でかきけされそうなアメリカの声を、イシユメルはちゃんと聞き取ってくれた。いえ、それがどうとういわけでもないのだけれど。

一瞬動揺した頭の中をクリアにして、呟く。

「あんな馬車、実在するんですね」

ゆつくりと、整備された道を進む馬車。それはどれだけメルヘンチックなんですかと問いたくなるほど愛らしかった。ピンク色の塗装は車輪にまで及び、形はよく言えば花の蕾、悪く言えばたまねぎ型。キラキラかつテクテクで、太陽の光を反射して眩しいことこの上ない。馬はもちろん白馬。そして馬を引く乗車さえも、……ピンク。

「俺が一番嫌いな人種だな」

イシユメルは顔を歪め嫌悪感を隠そうともしない。ひらひらふわふわの砂糖菓子のようなお姫様。世間知らずで自分では何も出来な

い、そんなお飾りの姫君がイシュメルは嫌いだった。

「自分のことぐらい自分ですればいい。いつまでも親のすね齧っているような嫁は俺は貰わん」

ちよつとまであなたそれ自分のことではないですか。いいたかったけれど、やけに真面目な顔をしていたから、アメリカは言い返すことはできなかった。

気付けば既に馬車は階段のすぐ下に止まっていて、乗者が丁度馬車の扉を開けるところだった。

かつん。

そんな音でも聞こえてきそうな踵の高い靴が地に下りた。その色やはりピンク……ではなかった。す、と馬車から降り立ったのは。

ドレスや靴もド派手なピンクかと思いきや、反してそれは清楚な純白。小さな首飾と頭のティアラのみが装飾品で、豪奢すぎていた馬車には似つかわしくない、可憐で小さな少女だった。

透き通るような白い肌が太陽の光を反射する。相反するように、その長く真っ直ぐな髪は闇のような漆黒。宝石のように大きく輝かしい黒い瞳が、階段の上で待つイシュメルに向けられたのがわかった。

ひゅっ、とイシュメルが小さく口笛を吹く。どうやら予想外な展開に、彼のお姫様は王子のお気に召したようだった。イシュメルと目が合ったのだろう、お姫様が柔らかな春の陽光のような微笑を浮かべた。

イシュメルは彼女をエスコートするため、完璧な動きで階段を下りていく。小さな姫に見惚れていたアメリカは、慌てて自分の主の後ろについた。

03. 猫かぶりな王子様と麗しき白の姫君（後書き）

読んでくださり有難うございます。

04. 自己中心的な王子様と泣き虫な護衛

階段を下りる王子に後ろから、一番嫌いな人種ではなかったんですか、とこっそりと問うと「美人は好きだ」と前を向いたまま即答された。

階段を最後まで下りると、姫は待ちきれないように自ら王子に歩み寄った。王子にたどり着く二歩手前で立ち止まり、白いスカートを小さく持ち上げた。

「お初お目にかかります。ジュナスのミアラーヌです」
見た目に違わぬ澄んだ可愛い声。

「イシュメルと申します。可憐なミアラーヌ王女、どうぞお手を」
青い目を細め、イシュメルは王女に微笑みかける。王女はそっと、差し出された手に自分の手を重ねた。ちっさ！と思わず心の中で叫びたくなるほどその手は華奢で、男であるイシュメルの第二間接までほどの大きさだった。それならば恐らくアメリカの手よりも一回り小さいだろう。

こちらへ、とイシュメルが少女をエスコートしながら階段を登る。降りてくる時とは違い、王女の歩調に合わせゆっくりと。その後ろをついていきながら、ふとまわりの貴族達の会話が聴覚に引っかかった。

「これでこの国も安泰ですわね」

「王子は護衛の少女に好意を寄せている、だなんて噂もありましたものね」

「一国の王子が護衛に？ それは初耳ですわ。そんなにその少女はお美しくて？」

「いえ、それが平凡だけが取り柄のようなただの子供ですよ。ほら、丁度あそこに」

視線を感じた。見られている。階段を登っているので見えるのは後姿ぐらいだろうが、それでも気まずい。

王子が私に好意を？ 馬鹿なことを言わないで欲しいと思う。俺がもらってやるとかどうとか今まで幾度となく言われたけれど、そんなのただの暇潰しか思いつきでしかなく、その中に本意なんて1%だって含まれないというのに。

「まあ、男物の服を着て……。色も黒いし、品がありませんわ」

「そうですね。だから私、こんな噂も聞きましたの。王子が好意を寄せているのではなく、寄せるように仕向けられた、という噂」
「それは、どういう……？」

「つまり、あの護衛がイシュメル王子をたぶらかした、ということですわ」

「ええっ!？」

またか。嫌だ、気分が悪い。あの時の記憶が脳裏をちらつく。今は違う、あのときより何倍も、私は強い。

そう自分に言い聞かせるのに、体は自己暗示にかかってくれない。目の前が点滅するように白っぽくなり、かと思えば一瞬の内に真っ黒に塗り潰されたりで、階段を踏み外しそうになる。

「だってあの美貌の王子さまが、あのようなあまりにも普通の少女を相手にするわけではないでしょう？ それなら考えられるのは、護衛の少女の方が王子をそそのかしたとしか」

「確かにその方が納得がいきますわ」

一步一步慎重に階段を登る王子と王女に早く登ってください、と言いたくなる。速く速く、あの会話が聞こえない場所まで。

「しかしミアラーヌ王女がいらっしゃった今、王子の頭の中は美しいあの姫君のことだけでしょうね。護衛なんて眼中ではないわ」

「そうですね、本当に完成したお顔をしていらしたこと。私信じられませんでしたもの……」

やっと階段を登り終わり、城の扉が開かれる。逃げ込むようにするりと体を滑り込ませると、額に汗をかいていることに気付いた。後ろで扉が閉まると世界が一瞬の内に変わってしまったように、外の喧騒が一気に遠ざかった。ほっとするあまり、床にへたり込み

そうになる。慌てて自分に言い聞かせる。頑張れ、あと少しだから。王と妃と王子、そして王女4人のでの会食がこの後控えている。あとはそこでじっと王子の後ろで立っていれば良い。それでいいんだから。

「おい、アメリカ」

「えっ、はいっ？」

不意のあまりの驚きが言葉にも出てしまう。ミアラーヌ王女がくすりと笑みを零した。そんなちょっとした動作までもが一枚の絵画のようだった。私もこんなに綺麗だったら。などと考えていると、王子が手を伸ばしアメリカの額に触れた。びくんっと後ろへのけぞると、王子がそれを遮ろうとアメリカの左腕をきつく掴んだ。

「お、王子……？」

「熱がある。黙っていたのか」

「熱？」

「こんなに熱いのに気付かないわけがないだろう、いつから気付いてた？」

腕を掴まれているので王子の詰問から逃れることが出来ない。熱があるなんて気付くどころか考えもしていない。しかしそれよりも、と声をひそめて、

「王子、王女がいます。私は大丈夫ですから、とにかく会食に――」
行きますよう、と言い終わる前に、掴まれた左腕にさらに力が込められた。「痛っ……」しかし王子は動じない。そしてちっと舌打ちの音。

「とにかくお前は部屋戻って寝ろ」

「いえでも会食が……」

「いいからっ！」

あまりの剣幕に、再度びくりとしてしまう。そこで初めて王子はあつという顔をして、けれどすぐに恐い顔に戻った。裏腹に、それと同時に掴まれていた左から圧迫感が消える。イシュメルの手が腕から離れていた。

「会食ぐらい護衛がいなくてもいい。だから絶対にお前はついてくるな。……行きましよう、ミアラーヌ王女」

何が何だかわからない、という風に見守っていたミアラーヌ王女をイシュメルはややトーンダウンした声で促す。何が何だかわからないのはアメリカだって同じだ。

ぐるぐると思考がまとまらない頭のままもややしている、何時の間にか王子と王女は遠ざかっていた。いるのは見回りの衛兵が数人だけ。心配そうにアメリカを窺っているが、当の本人はそれに気付く余裕がなかった。

何であんなに怒っていたんですか。何であんなに突き放したように言ったんですか。何であんなに――

泣きそうな顔を。

怖い顔をしていたけれど、それは何故か、どこか今にも泣き出しそうな表情で。そんな顔をされたら、アメリカが強く言うわけにもいなくて。でもやっぱり、何が何だかわからなくて。

「……………なんなんですかもう……………っ！」

やっこの思いでついた悪態は、何故か声が湿っていた。

04. 自己中心的な王子様と泣き虫な護衛（後書き）

中盤に差し掛かってきた……かも。（かも？
ここまで読んでくださり有難うございます。

05. 涙を零すお嬢さまと後ろむきな護衛

どうやって自分の部屋まで歩いていったのか、アメリカはまったく覚えていない。ただ気付いたらベッドに寝ていて、ひどく喉が渴いていた。

開きっぱなしの窓から夜空が見える。私そんなに寝てたっけ。眠ったという記憶もない。呆れて苦笑が漏れた。

月の位置から見て真夜中過ぎだろうか。そんな時間なら会食も終わってるな――そう思いかけて、イシュメルの言動が頭を掠めた。頭を振る。水を飲んだらもう一眠りしよう。きつとぐっすり寝たら、もっと前向きに考えられるはずだ。

そういや今日剣の稽古してないな。一日でも休むと剣の師である父はそれにすぐに気付くから嫌なのだが、今の調子ではそうも行かないだろう。体が泥のように重い。これでは剣を振るどころか部屋を出るのでさえも一苦労だ。

目で水差しを探し手近なテーブルに見つける。あんなところにおいてたっけ、と不思議に思いながら手を伸ばし、水差しの隣に置いてあるコップにとくとくと注いだ。ぐいっとあおって、美味しいから何でもいいやと考えることを投げる。

ぽすっと背中からベッドに倒れこむ。窓に目を向けると月の明るさが目に痛い。そういえば月をこんなにまじまじと見るのも久しぶりだ。この頃は王子が振り回してくださるおかげで、部屋に帰ってくるなり眠ることしかしていなかった。

それ以前は。

「駄目だなあ……」

考えないようにしていたというのに、今日の貴族の会話が鮮烈に思考を焦がす。いつからか聞かなくなっていたその噂を、何故今さら掘り起こしたりするのだろうか。考えないようにと考えている限りそのことを考えているのだという事実、アメリカは気付いていな

かった。

そうだ。そんな噂が最初に流れたのは、確か3年ほど前のこと――

「あなた、王子のなんですよ！？　どうしてわたくしの邪魔をなさるの！？」

いきなりだった。有力貴族のお嬢さまである少女に突然怒鳴りつけられ、アメリカはただ呆然としていた。

王子から「昼飯は腹が空いていないのでいらない」という自分勝手極まりない言伝を料理番に伝えてくれといわれ、アメリカは城内を歩いていた。それを突然「その護衛！」と呼び止められ、何かと思えば。

「失礼ですが私はお嬢さまと面識がございませんが」

「よくもっ……よくもぬけぬけとそんなことが言えるわね！　わたくしとイシュメル様の婚約を邪魔しておきながら！」

は？　と聞き返しそうになった。この人は何を言っているのか。

アメリカは眉を顰めた。

「婚約の、邪魔？」

王子に婚約の話が来ていることは知っていた。その相手がこの少女だということも聞いていた。しかしアメリカはそれを聞いて喜んだのだ。やっと王子も大人しくなるだろう、と。

それが何故そんなこじれたことになっているのか。

「どうしてあなたのような人にわたくしが負けるの！？　容姿だって家柄だって地位だって、わたくしは然るべきものを持っているのに！　それに比べてあなたはみすばらしいただの護衛……っ、それなのに、それなのにつ！」

目から大粒の涙を零しながら泣き叫ぶ少女に、アメリカは言葉を失った。うわああああ、と泣き崩れられ、アメリカはただ呆然とそれを見ているだけだ。

「あ、あの……」

肩に触れようとした手が、ぱしっと叩かれ、拒絶された。

「触らないでっ！ あなたなんかに触れられるなんておぞましくて吐き気がするわ！」

涙声で、それでもしっかりとした声音だった。心からそう思っているのだろうとアメリカに理解させるには十分すぎるほど芯の通った声。

「あなたがたぶらかしたんでしよう！　じゃないと王子が自らあなたを選ぶはずがないわ！　最低っ最低よっ！」

最低よ、どれだけ汚いの、あなたなんて死んでしまえばいい――……。

少女の罵声を、アメリカはただただ呆然と聞いていた。

05. 涙を零すお嬢さまと後ろむきな護衛（後書き）

自分で書いていて嫌な回だこれ……。

ここまで読んでくださって有難うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8618b/>

王子と護衛と、姫様と

2010年11月13日02時47分発行